

29Y-am02S

薬学生主体による薬育活動の児童への有用性について

○小路 晃平^{1,2}, 高野 美菜¹, 三田 愛², 宇野 智哉², 石河 里紗², 土井 理愛², 住里 研至¹, 若澤 佳澄¹, 堀 朱津美¹, 内藤 雅人¹, 島本 史夫¹(¹大阪薬大,²日本薬学生連盟)

【背景・目的】高齢社会におけるセルフメディケーションの向上、学童期早期からのおくすり教育が求められている。平成24年開催大学祭での薬学生による薬育活動の結果、児童への薬に関する基礎的知識の提供が有用であることを報告した。今回、提供内容の難易度と児童年齢による理解度の相関について検討した。

【対象・方法】平成25年開催大阪めっちゃハッピー祭等で模擬店企画の一環として2日間行った。未就学児17人、低学年児童32人、高学年児童11人を対象とした。1日目は薬剤師業務・カプセル剤適正使用についての紙芝居、模擬調剤体験、模擬来局対応体験、天秤薬効測定を行い、2日目は適正使用の紙芝居のみを除いて行った。前後でアンケート調査を実施し、結果を統計学的に解析した。

【結果】「薬剤師業務」設問に関しては、1日目では未就学児25→25%、低学年17→46%、高学年20→100%と年齢に比例して適切な回答が上昇した。適正使用の話を除いた2日目では未就学児0→57%、低学年13→100%、高学年67→100%と全ての年齢層で理解度が有意に上昇した。「適正使用」設問に関しては未就学児14→57%であり、児童では36→89%と理解度が有意に上昇した。

【考察】全ての年齢で目的とした薬に関する基礎的理解の向上がみられた。適正使用に関するテーマ導入は、未就学児では難解であったため全体の理解度が低下し、高学年児童ほど興味が深まり全体の理解度向上に繋がったと推測された。

【結果】薬学生主体の児童薬育効果が確認された。年齢による学習効果の違いから、薬学生が服薬説明の基本姿勢を認識できる活動でもあることが示唆された。